布教教化を機能させるには（布教教化機能論）
―家の宗教から個人の宗教への変化を理解する―

（日蓮宗現代宗教研究所嘱託）　影山教俊

◆プロローグ

昨年は「世間の目線にたった布教（布教教化）」と題して、『現代宗教研究』第三十八号に小論を発表しました。その意味するところは、布教教化にあたって、まず「世間の人々が、宗教に何を求め、何を期待しているかという、世間一般の宗教的なニーズに気づくこと」が必要であるということでした。

ややもすると私たちの布教教化は、自分のニーズ（葬儀であったり、法事であったり、お寺の年間行事であったり）に準じて、お釈迦さまや日蓮聖人の教えを説く場合がほとんどであり、そこには世間一般の人々が、何をどう感じて、何をどう求めているかという、その教えを聞こうとする人々への配慮が足りないかも知れません。

じつは「布教教化」は、人と人の間で成立するものですから、それは当然のこと人間関係そのものといえます。しかし、それにもかかわらず、私たちの布教教化は、いままで日蓮聖人から継承した宗教的な情報を伝えるための技術的な向上や、またその情報ソースの研鑽ばかりに明け暮れていて、その布教教化を受け取る側の情報を入手して来なかったのです。

たとえば、ある事業家が商品を売って営業にしようと思うなら、ただ漠然と商品を並べるヒトはいないはずです。その業界では、いまどのような商品が売れ筋になっているか、消費者がどのような商品を求めているか、必ず市場調

査をおこない目算が立ってから実施するはずです。人間関係から考えれば、それは当然のこと、ヒトは自分の好みにあったものを買い求めますから、商品を売りたければその好むものを提供する必要があります。

この構造不況の現代社会にあって、コンビニエンス・ストアー最大手のセブンイレブンは、売り上げを伸ばしています。それは全国の店舗をオンライン化したレジスターで管理し、その商品を購入した人の年齢・性別・何時・何処・気象条件などの情報をリサーチしているからなのです。それによって「誰が何時、何処で何を買うか」を把握し、いまセブンイレブンは市場開発のツールとなり、セブンイレブンで売れる商品が売れ筋の商品となっているのです。

また数年前の春に、「だんご三兄弟」というタンゴが爆発的にヒットしました。実際にはこれも、ヒットしたのではなくヒットさせられたのです。あるCMプランナーは、今どきの子供たちの生理状態、ここ一〇年の間、子供たちの歌う音程が数オクターブ下がっていること、平熱の低い低体温児であること、心拍数が少ないことなどの情報をリサーチし、子供たちに合わせた歌を作りヒットさせたのです。

これらは言いかえれば、その時代と大衆の「スタンダード」、つまり世間一般の情報の中で、何が受け入れられやすい情報なのかを見極めたということなのです。「世間の目線にたつ」ことによって、その向こう側にいる姿の見えない世間一般の人々の声を聞いているのです。

ではいままで、なぜ私たちは、布教教化を受け取る側の情報を入手しないまま、つまり、相手の好みも分からないまま、ただ一方的にお釈迦さまや日蓮聖人の教えを伝える形でやってこられたのでしょうか。

じつは、この認識自体が誤りなのです。実際にはやってこられたのではなく、布教教化を人間関係として捉えたとき、その関係が一方通行になっているときは、それはすでに破綻した関係になっているのであって、ただそれに気づいていなかっただけなのです。

現在、宗門レベルで布教教化がままならない状態になっているのも、じつに布教教化の対象である世間一般の人々との関係が、一方通行となって破綻しているからなのです。まさに「世間の目線にたつ」ということが意味するものは、このような自分の姿、自己像そのものに気づくことでもあるのです。

さて、ここで大変重要な問題が見えてきました。それは布教教化の人間関係が一方通行になって破綻しているために、宗門レベルで布教教化がままならない状態になっていても、現在の日蓮宗寺院が存続できるということは、布教教化をしなくとも何か別の事業によって、寺院が運営されていることを意味します。

さきのように、ある商品を売って営業にしようと思っても、その商品が売れなければ、その会社は破綻します。もしその商品が売れなくとも、その会社が破綻しないというのなら、その会社はすでに何か別の事業を起こして、それが営業になっていることになります。

こう考えますと、現在の寺院のあり方が見えてくるはずです。布教教化の関係は破綻しているのですから、それ以外の事業といえば、当然のように葬儀・法要対応型の寺院運営があげられます。

そして、いままで布教教化の関係が破綻していながら、なぜその破綻に気づかなかったのかといえば、布教教化をしなくとも、葬儀・法要対応型の寺院運営でやってこれらたから、ということになります。

場合によっては、布教教化の関係が破綻していても、葬儀法要に付随する法話ならば、会葬者たちは葬儀法要のセットとしては拝聴しているために、そこでは布教教化の関係が成立していると錯覚してしまうのです。

そして、この布教教化の破綻した関係が継続されると、布教教化の関係が成立しているという錯覚によって、私たち僧侶は世間一般の人々を、対峙関係に捉えることがあたりまえのようになってしまう。

この、対峙関係に捉えるということは、「世間一般の方々と私たち僧侶は違う」という峻別であり、教え説く立場

（能化）と聞く立場（所化）というように、一種の立場的な違いとして理解するようになることなのです。まさにこの対峙関係が、布教教化では破綻した関係になっているということなのです。

とくに近年の僧侶は、住職の師父から弟子として寺院を継承する形が多いですから、必然的に僧侶といっても職業的な階級意識が身についてしまい、どうしても対峙関係として捉えてしまいがちなのでしょう。

ですから、いまここで「布教教化を機能させる」には、さきのような僧侶という職業的な階級意識から離れて、「世間に自分自身がどう映っているか」という、自己像への気づきが必要なのです。この「自己像の自覚」がない限り、布教教化を機能させることは出来ないのです。

寺院という環境の中で、僧侶に耳障りの良いことをいう人は誰ですか。総代さん、世話人さん、あるいは経済的に豊かな檀家さんでしょうか。いずれにしても、ごく少数のお檀家さんでしょう。

さきのように、布教教化とは人間関係そのものですから、「アンデルセンの童話の『裸の王様』のように、私たちは『裸の僧侶』」であっては困るのです。まず、世間にどう見られているかの自覚が「布教教化を機能させる」のです。

これから、これらのことを二つの宗教のあり方、一つは私たち伝統教団のように「葬儀法要の施収入で運営されている宗教」と、もう一つは新宗教のように「世間の現実苦のニーズに応える施収入で運営されている宗教」のあり方を対比させながら、どのようにしたら、私たちの布教教化が機能するか、その問題点を明らかにして行きたいと思います。

1　新宗教はなぜ流行するのだろうか

まずここでこの論を進めるにあたり、日蓮宗の布教教化の現状に対して共通認識を持っておきたいと思います。それは、私たちの「布教教化が機能していない」という現実の認識です。このようにいいますと、そんなことはない、お檀家さんは聞いてくれている、と反駁したい方もあると思います。たしかにそれはその通りなのですが、それはあくまで葬儀法要のニーズということであって、世間一般のニーズという意味では、「私たちの布教教化は機能していない」という事実を認めざるを得ないはずです。

ではここで、私たちの「布教教化を機能させる」には、一体どのようにしたらよいのでしょうか。その手掛かりは、葬儀法要というお檀家さんのニーズではなく、世間一般の宗教的なニーズに応える形で、布教教化が進んでいる新宗教教団などの実状を探れば、一目瞭然のはずです。

ここで現在いろいろなと社会的に取り沙汰されていながらも、それでも組織を拡大している宗教教団をあげますと、オウム真理教、富士大石寺顕正会、創価学会などがあります。文化庁発行の『宗教年鑑』などによれば、宗教法人として認められているのはおよそ四〇〇団体で、その総数はおおよそ一九万団体あまりと膨大な教団がありますが、ここではこの四つの宗教組織の実状をあげましょう。

まずオウム真理教の場合は、解散後その名称を「アーレフ」と改め、宗教団体として活動を続けており、解散後一〇年を待たずに出家信者一〇〇〇人をすでに回復し、資産は五〇億円とも六〇億円とも推定されております。

また富士大石寺顕正会の場合は、立教開宗七五〇年当時には会員一〇〇万人を達成し、国会議事堂前を三〇万信徒で埋めつくし、国家諫暁すると息巻いており、実際に一〇〇万信徒達成記念式典を開催しています。息巻いたほどには国会議事堂云々の国家諫暁は行われませんでしたが、それでも会員の実数は、この数年八五万人程度を推移しています。しかし、収益事業ではなんと年商六五億円といい、収益の大半は例の『国家諫暁書』であるといいます。

さらに創価学会の場合は、ＳＧＩ（国際創価学会）をかかえて、池田名誉会長の権勢は安泰だといいます。その会

員総数は公称八二一万世帯というが、実際には三五〇万世帯程度だといいます。今回の参院選では一〇〇〇万票までは延びなかったものの、なんと八六二万票を集め、公明党は政権与党に参画し、自民党の政権基盤を支えています。また会員の寄付行為などで年間四〇〇〇億円以上の収入、総資産一〇兆円ともいい、収益事業では年商一八一億円と、イトーヨーカ堂やＫＤＤＩと肩を並べる企業でもあるといいます。（『週刊ダイアモンド』第九二巻三一号　株式会社ダイアモンド社　二〇〇四・八・七）

さて、このように立て続けに布教教化の進んでいる教団をあげますと、私がこれらの新宗教を褒め称えているように見えるでしょうが、ここで皆さんに伝えたいことは、これらの新宗教が「葬儀法要の施収入で運営されていない」という事実です。

これらの新宗教が「葬儀法要の施収入」に依存しないということは、世間の目線にたった布教教化をしているからなのです。そのポイントは何かといえば、それは「世間一般の宗教的なニーズに応えている」ということです。

言いつくされていますが、それは「病・貧・争のケア（抜苦与楽）を具体化している」という事実を示しているのです。近ごろの新々宗教について、それは「若者たちのむなしさ」だという学者もいますが、ようするに「世間一般の宗教的なニーズに応えている」こと、「世間のヒトの現実苦」に目線があるということです。

さて、ここに二つの宗教のあり方が見えてきました。一つは私たち伝統教団のように「葬儀法要の施収入で運営されている宗教」と、もう一つは新宗教のように「世間の現実苦のニーズに応える施収入で運営されている宗教」です。これをもう少し具体的に理解して行きましょう。

2　寺院社会の司祭階級化について

いま二つの宗教のあり方について触れましたが、この二つの宗教のあり方を理解するために、まず現代の寺院社会の司祭階級化、寺院継承者の集団化について論を進めましょう。

さきに、「僧侶といっても職業的な階級意識が身についてしまい、どうしても対峙関係として捉えてしまいがちなのでしょう」といった理由がここにあるのです。それは敗戦後の宗教法人法の改正によって、それまでの寺院や僧侶のあり方が変化したからなのです。これは日蓮宗ばかりに止まらず、伝統教団の全般に当てはまることなのです。

これを敗戦後の六〇年史から眺めると釈然とします。周知のように昭和二十年に終戦を迎え、まず何が起きたかといえば、戦前までの日蓮宗の基本的な組織は、それまで各門流の本山と末寺という関係で維持運営されていたものが、とくに昭和二十二年に農林省が発令した農地の所有制度の改革（農地改革）によって、宗教法人が持っていた田畑などの寺領が解放された結果、それまでの本山と末寺という寺院組織の解体が余儀なくされたのです。

そのため、現在の宗教法人日蓮宗は、昭和二十六年四月三日に公布された新宗教法人法の下に、包括法人としての宗教法人日蓮宗を組織して、各都道府県に登記された日蓮門下の寺院を日蓮宗として包括し、全国の管轄区域（管区）に宗務所を設置し、その管区内（管内）の寺院・教会・結社を統括して組織されたのです。

そして、この組織の変化によって、それまでの本山と末寺という由緒や故事来歴による寺院運営から、日蓮宗宗制（日蓮宗宗憲・日蓮宗規則・日蓮宗規定）に基づく法人運営へと転換されたのです。この日蓮宗制に基づいた寺院運営によって、本山と末寺関係が解体されて、それぞれの寺院は法人の上では同等の立場で独立しました。しかし、実際には法人の上では同等の立場でも、寺領などを失ったために自立した寺院運営が行えずに、かなりの寺院が経済的に行き詰まったのです。

本山であってもお檀家さんの少ないお寺は疲弊し、末寺でもお檀家さんの多いお寺は残ったのです。つまり、お檀家さんの多いお寺が優等寺院へという変遷をたどったのです。本山が疲弊したように、お檀家さんの少ないところは

大変な状況になったのです。簡単にいってしまえば、葬儀・法要対応型の寺院運営が可能な寺院が残ったということなのです。

また、敗戦後のこのような六〇年に及ぶ歳月が、ある意味では伝統教団の宗教性を壊したことになるのです。どのようなことかといえば、本山と末寺の関係が解体されたことによって、本山で修行した僧侶が、末寺からみんな成り上がって行くという循環、本山と末寺の循環がなくなってしまったからです。

妙に聞こえるかも知れませんが、戦前の寺院組織では僧侶はある程度、自分の器の範囲で成り上がる余地があったのです。ところが、敗戦後の法人改正によって、末寺から本山への循環がなくなり、みんな成り上がったところの寺院に定住するようになった。

とくに葬儀・法要対応型の寺院運営が可能なお檀家さんの多いお寺では、経済的に成り立っておりますから、そこから動くことが出来なくなります。そのような寺院では、子供さんが寺院の後継者として、師父である住職の跡を継ぐことが当然のようになって行きます。

繰り返しますが、この大きな変化によって、じつは伝統的な継承事も途絶えてしまったのです。それまでは本山の檀林などで修行した後、小寺から大寺へとそれなりに寺院の動きがありましたから、お経や回向を聞けば、あの僧侶はどの門流の檀林で修行したのか、また貫主さまのご回向を聞けば、どこの本山の貫主さまかが分かったのです。

ところが、現在のような日蓮宗制に基づく葬儀・法要対応型の寺院運営では、それまでの寺院の由緒や故事来歴という権威性から、寺院の等級数による経済的な権威性がものをいう状況になったといっても過言ではないはずです。

ここでこの大きな変化を整理しますと、敗戦後の寺院運営が葬儀・法要対応型の寺院運営になったということは、僧侶の考え方や感じ方が、いつもお檀家さんつながりのところで行われているということです。そして、この「お檀家さんつながり」ということは、いままで宗教的な位置づけにあった檀家が、お寺の経済を支える顧客としての檀家

というように、宗教的な位置づけから、経済的な位置づけへと変わったことを意味します。

そうなると当然のように、宗教性が喪失しがちになる。なぜかといえば、さきほどのように、葬儀法要だけによって経済基盤が支えられているということは、日蓮聖人の教えを具体化しなくても、それで寺院運営ができるからなのです。

さきに、「いままで布教教化の関係が破綻していながら、なぜそれに気づかなかったのかといえば、布教教化をしなくとも、葬儀・法要対応型の寺院運営でやってこれらた」と言ったのはこのことなのです。

このような経緯によって、現代の寺院社会の司祭階級化、寺院継承者の集団が形成され、それによって僧侶という職業的な階級意識が養われてしまい、お檀家さんの葬儀・法要のニーズにはうまく応えられるものの、世間一般の人々とはどうしても対峙関係となって、布教教化が機能しないのです。

3　家族制度と家の宗教の崩壊について

いま敗戦後の寺院社会の大きな変化について、僧侶の司祭階級化や寺院継承者という職業的な階級意識について論じましたが、じつはこの大きな変化は、日本の民主化をはかる進駐軍の施策であり、それは基本的人権の尊重を基調とする「日本国憲法」（昭和二〇年十一月三日公布、翌二十二年五月三日実施）によってもたらされたのです。ここでは敗戦後の日本社会の民主化によって生じた、大家族の棲み分けと地域社会のつながり、家族のつながりの変化について論じます。

さて、さきに二つの宗教のあり方について、一つは「葬儀法要の施収入で運営されている宗教」の伝統教団と、もう一つは「世間のニーズに応える施収入で運営されている宗教」の新宗教の二つが見えてきたといいました。さらに

この二つの宗教のあり方の違いをニーズという切り口で眺めますと、「お檀家さんの葬儀法要のニーズ」に応える伝統教団と、「世間の現実苦のニーズ」に応える新宗教教団とに対比できます。

では、この違いが何を意味するかといえば、現代の伝統教団は「檀家の葬儀法要のニーズ」に応えるため、つまり、現代の僧侶や寺院はお檀家さんの「家の宗教」を執行するための司祭階級や寺院継承者の集団であって、そのために宗教的な技能教育を受けてきたといえます。（ここでは先祖をまつる信仰を仮に「家の宗教」と呼ぶことにする）

ところで、このような「家の宗教」が機能していた時代は、戦前の家族制度がしっかり機能していた時代でした。その時代は大日本帝国憲法（明治二十二年二月十一日発布）によって、天皇の大権のもとに臣民の権利義務が規定されて、長男が家督（戸主の身分に付随するすべての権利義務）を相続することを許されていました。長男はこの家督相続によって、先祖代々の家系を家の宗教として相続することでした。つまり、「家の宗教」を相続することは、「家の宗教」の儀式典礼を執行する檀那寺を檀家として継承するということだったのです。

そして、家族制度によって長男が家督を相続することは、そこでは家長の権威性と、それを支える家財産の経済基盤の相続と同時に、先祖という家系の相続が行われ、それは家の宗教を執行する寺院の檀家を経済的に支えることで成立していたのです。皆さんの寺院でも、戦前には何軒かの大檀越がお寺を経済的に支えていたはずです。

また、その時代の「家の宗教」を執行する伝統教団の社会的な位置づけは、家族制度上の家督の権威性を補償する形で機能しており、その時代の人々は家族制度の中で、大家族の棲み分けによって、地域社会のつながり、家族のつながりが、世間一般にあって誰もが経験する個人の苦しみをしっかりと支え、生きる意味を与えていたのです。まさにそこでは、先祖をまつる「家の宗教」が宗教として機能していたのです。

しかし、さきのように、この家族制度の崩壊の歴史といえる戦後の六〇年の歳月によって、現代社会は「大家族か

ら核家族へ」と、家の単位から個人の単位へ変貌したのです。とくに昭和二十二年に農林省から発令された農地の所有制度の改革（農地改革）によって、寺領が喪失したように、家族制度を支えた経済基盤（田畑山林・家屋敷）が失われると、相続する家が消え、長男の継承する家長の権威性もなくなり、大家族の棲み分け、地域社会のつながり、家族のつながりを支えた先祖をまつる「家の宗教」も消えてしまったのです。

このように、家族のあり方が大家族から核家族へと変化する中で、核家族という個人によって営まれる家庭は、家族制度に支えられた時代のように、自分の氏素性として名前は継承するが、それまで先祖代々から受け継がれてきた、家長としての権威性も、経済基盤（田畑山林・家屋敷）も失ったために、それまで「家の宗教」を執行する寺院を檀家として支えてきた力も失ったのです。またそれによって、僧侶や寺院もそれまでの権威性を失ってしまったのです。これらが、昨今問題となっている地域社会の崩壊の原因でもあります。

これでお分かりのように、戦前は大日本帝国憲法によって庇護されてきた家族制度が、戦後の基本的人権の尊重を基調とする「日本国憲法」に基づく施策、とくに農地解放などによって、それまで先祖から継承してきた経済基盤を失ったことで家族制度が崩壊し、またそれによって家族制度を支えた先祖をまつり、「家の宗教」を執行する寺院を、檀家として経済的に支えられなくなってしまった。またそれに伴って、僧侶や寺院の宗教的な権威性も失われてしまったのです。

3　核家族化と個人の宗教について

さて、このように家族制度が崩壊し、「家の宗教」と一緒にそれまでの僧侶や寺院の宗教的な権威性が失われると、その後の社会にはどのような変化が起きたのでしょうか。

さきに、家族制度によって社会が支えられていた時代には、「家の宗教」を執行する伝統教団の社会的な位置づけは、大家族の棲み分けによって、地域社会のつながり、家族のつながりが、世間一般にあって誰もが経験する個人の苦しみをしっかりと支え、生きる意味を与え、そこでは先祖をまつる「家の宗教」が宗教として機能していた、といいました。

そこで、そのような「家の宗教」が家族制度と共に崩壊してしまうと、それまで先祖をまつってきた「家の宗教」の、宗教としての機能も一緒に失われ、「家の宗教」を執行する僧侶や寺院には、形骸化した葬儀法要のニーズだけが残ったのです。

そして、このような大家族から核家族への社会的な変化によって、それまで「家の宗教」が補償していた宗教的な機能が喪失したのですから、核家族社会に生きる人々は、「誰もが経験する個人の苦しみをしっかりと支え、生きる意味を与えてくれる」であろう「個人の宗教」を探し始めたのです。

これが敗戦後になって、「雨後の竹の子」のように出現した新興宗教の勃興の要因です。詳しいことは宗教社会学の先生に譲り、このような「個人の宗教」を求める動きが、現在の新宗教、新々宗教へとつながっているのです。

では、この社会では何がどう変化しているかといえば、現代社会は核家族を一つの単位とする個人の集団ですから、その意味で現代社会で頼れるものは、基本的人権という個人の権利とそれを主張する個人の力のみなのです。

現代人は「家の宗教」を失った時点で、この個人の力で、自分の生き方なり、人生観なりを発見しなければならない運命を背負ったのです。家族制度上において、僧侶や寺院の宗教的な権威のもと、家の宗教は先祖をまつることで、自分も個人としてではなく一族という氏素性の上で、自分の生き方や人生観が補償されていました。これを気取っていえば、「家の宗教」に中に自分史を見いだしていたといえるのです。しかし、このような「家の宗教」としての機能は、家族制度が崩壊したと同時に停止し、それまで自分自身を支えていた自分史も消え去ってしまったから

なのです。

ここまでくると、さきのように、なぜ宗門レベルで「布教教化が機能していない」かという原因が分かるはずです。それは言うまでもなく、現代の核家族社会にあって、僧侶や寺院のあり方が、いまだに家族制度の時代そのままの「家の宗教」として、葬儀法要のニーズのみに応えようとしてるからなのです。

ハッキリいえば、僧侶や寺院が家族制度の時代そのままの「家の宗教」、葬儀法要のニーズのみに偏っているために、個人の生き方や人生観の探求といった自分史を発見するツールとして機能していないということなのです。

これが何を意味するかといえば、新宗教への入信過程を例にとって説明すれば、ある新宗教の信者が「その宗教は悪い宗教だよ」と説明され、解釈され、説得されても、その宗教に入信してしまうのは、そのヒトが教義、教学を信じているからではないのです。そのヒトにとって、その宗教が自分の生まれ育った家庭より居心地がよい、お父さんや、お母さんや、場合によってはご主人や、奥さんといるより、そこが居心地の良い場所と感じるからなのです。そこに自分史を見いだしているからなのです。

家族制度の時代は、家族の中にいさえすれば、みんな自分の居場所があり安心できたが、現代では自分自身の物語が必要なのです。自分自身で説明して納得してもらわなければ、またその力を身につけなければ、現代ではその存在価値を失うからなのです。

しかし、このような個人のあり方だけでは、生まれてから、あの世へと旅立つまでの数十年は、ただ過ぎ去って行く時間でしかない、だれにも認められない時間の流れだけ、真っ暗な闇を航海するようなものです。

この航海にただよう時間の流れに、意味を与え、安らぎを与えるものは、自分史という個人の物語を発見させてくれるものなのです。どのような両親、伴侶、子供たち、友人たち、みな人生という時間につけられた意味なのです。このようなあり方が自分史を満足させる「個人の宗教」なのです。

4　私たちの布教教化の現場と、葬儀法要について

さて、いま宗門レベルで「布教教化が機能していない」その原因は、現代の核家族社会にあって、僧侶や寺院のあり方が、いまだに家族制度の時代そのままの「家の宗教」として、葬儀法要のニーズのみに応えようとしてるから、僧侶や寺院が家族制度の時代そのままの「家の宗教」、葬儀法要のニーズのみに偏っているために、個人の生き方や人生観の探求といった、自分史を発見するツールとして機能していないということでした。

ところで、近年になって大変な問題が見えてきたのです。それは宗門レベルで、これまでの寺院運営は、布教教化の関係が破綻して布教教化ができなくとも、実際は葬儀・法要対応型の運営でやってこられたのですが、この布教教化の破綻した関係があまりに長く継続されたために、どうやら頼みの綱である葬儀法要もまならない僧侶像がクローズアップされてきたのです。

それは昨年の岩間湛正総長の施政方針の四本柱の一つに「葬儀に関わる全てのことについての規範」があげられ、いままで当然のように行われてきた葬儀法要の全般を見直しするように諮っているところからも分かります。

いままで当然のように行われていた葬儀法要が、なぜ今になってその全般が見直されなければならなのでしょうか。それは先輩諸氏の目線では、どうやら近ごろの若い僧侶は、「葬儀法要も満足に出来ない」ように見えているということなのです。

そして、この「葬儀に関わる全てのことについての規範」として出された打開策なるものは、そのほとんどが葬儀法要の技術論であり、「引導文のあり方」や「通夜説教の理念と実践例」などのマニュアル化の必要性を力説し、読経・引導・回向も含めた葬儀全体が通夜説教の内容に反映されるべきであることなどが主張されています。

しかし、この問題の所在は、若い僧侶方の葬儀法要に対する技術的な仕込みではないのです。さきに「布教教化を

人間関係として捉えたとき、その関係が一方通行になっているときは、それはすでに破綻した関係になっている」といったように、現在、宗門レベルで葬儀法要すらままならない状態になっているのも、じつに葬儀法要を依頼するお檀家さんと私たち僧侶との関係が、一方通行となって破綻しているからなのです。つまり、私たち僧侶や寺院の活動が、「世間の人たちにとって、すでに有難く映っていない」ということなのです。

なぜなら、さきのように、家族制度が崩壊し、「家の宗教」と一緒にそれまでの僧侶や寺院の宗教的な権威性までが喪失してしまったからなのです。そのために、世間の目線では「僧侶も世間一般の私たちと同じだから有り難くない」という感じ、お坊さんも私たちと同じ普通人という感覚になってしまっているのです。

この「有難くない」という感覚がどこからくるかといえば、私たちが営む葬儀法要は、じつは「死者を弔う」という非日常性の場面ですが、現代の僧侶は、さきのように、「僧侶という職業的な階級意識が養われて」いても、生活レベルでは世間一般とまったく同じ日常生活を過ごしております。つまり、世間一般の方々とまったく同じに、日常性をあたりまえに生きているので、そのため死者を弔う葬儀（非日常性）の場面では、「世間の目線」からは、たとえ袈裟衣を着け職業的な階級意識をもっていても、世間一般の人々との関係が一方通行で破綻していますから、「所詮、僧侶も私たちと同じ」という日常性の臭いによって、有難いとは感じられなくなっているのです。

そして、このような世間一般の人々の「家の宗教」を執行する僧侶や寺院によせる宗教的な権威性の喪失は、家族制度が崩壊して直ちに喪失したのではなく、敗戦後六〇年かかって徐々に現代のこの状況へと変化してきたのです。

ですから、葬儀法要が実際に機能するためには、それは葬儀法要の技術的な向上を云々することではなく、僧侶や寺院の活動がすでに「有難くない」のだから、その打開策は「僧侶や寺院の活動が有難くなる」ことを模索する必要があるのです

ここまでくると、この葬儀法要の問題も、さきの宗門レベルで「布教教化が機能していない」原因のように、現代

の核家族社会にあって、僧侶や寺院が家族制度の時代そのままの「家の宗教」、葬儀法要のニーズのみに偏って、個人の生き方や人生観の探求といった自分史を発見するツールとして機能していないからだと分かるはずです。

とくに葬儀法要の問題は、現代の寺院社会の司祭階級化、寺院継承者の集団化が形成され、それによって僧侶という職業的な階級意識が養われてしまい、葬儀法要を依頼するお檀家さんと私たち僧侶との関係が、一方通行となって破綻して「世間の人たちにとって、すでに有難く映っていない」ことへの気づきが必要なのです。

繰り返しますが、まさに「布教教化を機能させる」には、僧侶という職業的な階級意識から離れて、「世間に自分自身がどう映っているか」という、自己像への気づきが必要なのです。この「自己像の自覚」がない限り、布教教化を機能させることは出来ないのです。

◆エピローグ

今までながながと論じてきましたが、宗門レベルで「布教教化が機能しない」、その理由をごく簡単にいいあてれば、現代の核家族社会にあって、僧侶や寺院のあり方が、いまだに家族制度の時代そのままの「家の宗教」として、葬儀法要のニーズのみに応えようとして、個人の生き方や人生観の探求といった自分史を発見するツール、「個人の宗教」として機能していないからなのです。

そして、これらを理解するキーワードとして、二つの宗教のあり方、一つは私たち伝統教団のように「葬儀法要の施収入で運営されている宗教」と、もう一つは新宗教のように「世間の現実苦のニーズに応える施収入で運営されている宗教」のあり方をあげました。　またこの二つについて、敗戦後の六〇年に及ぶ歳月を遡ってゆくと、戦前の日本社会では大日本帝国憲法によって庇護されてきた家族制度が、戦後の基本的人権の尊重に基づく「日本国憲法」の施策によって崩壊する、という大きな日本社会の変化がありました。

戦前の家族制度を支えた「家の宗教」は、大家族の棲み分けを補償し、地域社会のつながり、家族のつながりを維持しながら、世間一般にあって誰もが経験する個人の苦しみをしっかりと支え、生きる意味を与えていた。まさにそこでは、先祖をまつる「家の宗教」が宗教として機能していたのです。

しかし、このような「家の宗教」が家族制度と共に崩壊してしまうと、それまで先祖をまつってきた「家の宗教」の、宗教としての機能も一緒に失われ、「家の宗教」を執行する僧侶や寺院には、形骸化した葬儀法要のニーズだけが残ったのです。

そして、家族制度の崩壊によって、家族社会は大家族から核家族へと変化し、そこでは、それまで「家の宗教」が補償していた宗教の機能までもが喪失してしまった。そのために、この核家族社会に生きる人々は、「誰もが経験する個人の苦しみをしっかりと支え、生きる意味を与えてくれる」であろう「個人の宗教」を探し始めたのです。

これが敗戦後になって、「雨後の竹の子」のように出現した新興宗教の勃興の要因であり、このような「個人の宗教」を求める動きが、現在の新宗教、新々宗教へとつながっているのです。

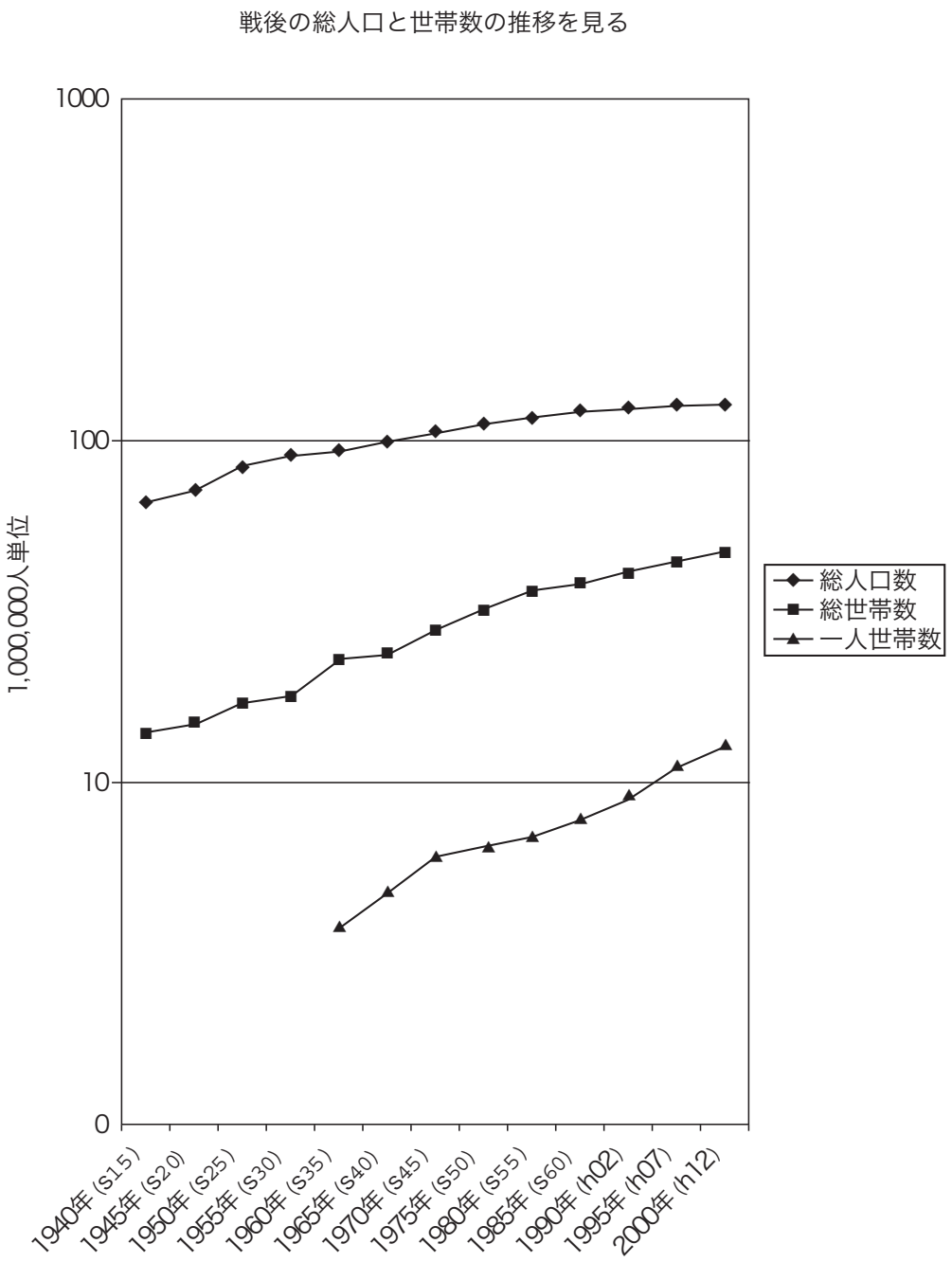
つまり、敗戦後の六〇年に及ぶ歳月を遡ってゆくと、さきの二つの宗教のあり方は、形骸化した葬儀法要のニーズに応える「家の宗教」と、世間一般にあって誰もが経験する個人の苦しみをしっかりと支える「個人の宗教」のあり方へとつながったのです。

さて、この事実を総理府統計局の人口の推移と、世帯数の推移などの数字から具体的に理解すると次のようになります。

「戦後の総人口と世帯数の推移を見る」

「戦後の総人口と世帯数の推移を見る」の数字とグラフをご覧ください。これは一九四〇年（昭和十五）から二〇〇〇年（平成十二）までの総人口と、総世帯数と一人世帯数の推移を表しています。

敗戦後の日本の総人口は、一九四五年から一九六五年までの二〇年間で約七千二百万人から約九千九百万人へと急増しますが、その後二〇〇〇年までは約一億二千七百万人とゆるやかな増加で、統計的に日本の人口は二〇〇五年か



らは確実に減少するといいます。

ところが、世帯数の推移はといえば、一九四五年から一九六五年までが約千四百万世帯から約二千四百万世帯へと比較的にゆるやかで、それから二〇〇〇年までは約四千七百万世帯と、ほぼ一・八倍に急増している。それも一人世帯数は約四百八十万世帯から千二百九十万世帯と、ほぼ二・四倍に急増しています。

これらの推移は、さきほどのように、敗戦後の日本の民主化をはかる進駐軍の施策であり、基本的人権の尊重を基調とする「日本国憲法」（昭和二〇年十一月三日公布、翌二十二年五月三日実施）によって、家族社会が家族制度によって家長を中心とする大家族から、個人を中心にする核家族へと変化したことを意味します。

そして、この変化によって家族制度を支えてきた「家の宗教」としての僧侶や寺院のあり方と、その「家の宗教」によって維持されていた大家族の棲み分けによる地域社会のつながりや、家族のつながりが崩壊したために、それまで先祖をまつってきた「家の宗教」の、宗教としての機能も一緒に失われ、「家の宗教」を執行する僧侶や寺院には、形骸化した葬儀法要のニーズだけが残りました。

そして、このような大家族から核家族への社会的な変化によって、それまで「家の宗教」が補償していた宗教的な機能が喪失したのですから、核家族の中に生きる人々は、「誰もが経験する個人の苦しみをしっかりと支え、生きる意味を与えてくれる」であろう「個人の宗教」を探し始めました。これが敗戦後に、「雨後の竹の子」のように出現した新興宗教の勃興の要因であり、このような「個人の宗教」を求める動きが、現在の新宗教、新々宗教へとつながっている。

ここで蛇足を付すならば、「布教教化を機能させる」には、私たち僧侶や寺院のあり方が、家族制度の時代そのままの「家の宗教」から脱却して、核家族の中に生きる人々の「誰もが経験する個人の苦しみをしっかりと支え、生きる意味を与えてくれる」であろう「個人の宗教」をしっかりと補償することなのです。

その補償するとは、どのようなあり方かといえば、さきに布教教化は人間関係そのものといったように、その関係が一方通行の破綻した関係ではなく、ブロードバンドのように双方通行の関係になることが急務だということです。